

◆日本心理学会 第67回大会シンポジウム 「テクノロジーと心」参加報告

茅原拓朗

東京大学

2003年9月14日に、東京大学本郷キャンパスを会場とした日本心理学会第67回大会における企画として、「テクノロジーと心」と題されたシンポジウムが開催された。本年は日本における最初の心理学研究室が東京大学に設置されて100年を迎えるということで力が入った企画が多数催されたが、本シンポジウムも大会長である佐藤隆夫氏(東京大学人文社会系)とVR学会会長である原島博氏(東京大学情報学環)によって企画され、また、これと連動して東京大学VRラボの一般公開も催されるなど(参加研究室:インテリジェントモデリングラボラトリー、館・川上研、原島・苗村研、廣瀬・広田研(50音順))も開催されるなど、日本心理学会・日本VR学会のジョイントシンポジウムとも言えるものとなった。

会場となった本郷キャンパス法文2号館一番大教室には、日本心理学会大会内のシンポジウムということでクローズドの企画であったにもかかわらず80名を超える参加があった。10時から12時まで2時間の開催時間の間に5人の講演者がトークを行い、最後に会場全体で討論を行う形で進められた。

最初に、企画者でもある原島博氏よりシンポジウムの基調となる講演があり、よりよいテクノロジーを目指す上で人間の心を考えることが不可欠であること、その上で、テクノロジーはこれまで基本的に不足や欠如など人間社会のネガティブな側面を補うために存在してきたが、今後はよりポジティブな側面に貢献して行かなくてはならないということが述べられた。次に、廣瀬通孝氏(東京大学先端科学技術研究センター)より、テクノロジストの立場から講演があった。この講演では、宇宙開発という大規模技術から始まったVRが、現在いかに人々を楽しませているに至っているかが国立博物館の大マヤ展におけるVRシアターなど具体例を交えて述べられた。3番目に、メディアアーティストである岩井俊雄氏(東京大学先端科学技術研究センター)より、目には見えない光の時間パターンを「聴き取る」作品(『サウンドレンズ』)や、視聴者の映像をリアルタイムに変換し

視聴者自身にフィードバックする作品などが紹介された。最後に、視覚障害と聴覚障害をもつ福島智氏より、知覚障害者が最も苦しむのがコミュニケーションの断絶であり、メディアテクノロジーがこの苦しみを取り除いてきたこと、そして障害者の立場からVRに求めるのは楽しみや喜びなどまさにポジティブなものへの貢献なのだということが述べられた。その後、講演者全員が登壇し、佐藤隆夫氏の司会によりフロアからの質問・コメントも交えて議論が行われた。

このように、単なる現状報告にとどまらない野心的なシンポジウムとなり、報告者個人としても大いに刺激を受けた。ネガティブな側面に光が当たりがちなのは心理学とて同様のことなのであり(もちろんそれは必要なことではあるのだが)、今後も技術と手を携えて解明しなければならない心理学の問題をまた新たに見いだした思いがした。最後に、聴衆に対する情報保障として会場に手話通訳が待機していたこと、視聴覚に障害を持つ福島氏に対する情報保障手法である指点字通訳が大変感動的であったことも添えておく(写真でもその様子がわかる)。



全体での討論の様子

◆INTERACT 2003 参加報告

桑原教彰

ATR

INTERACT2003は、9月1日から9月5日まで、スイスのチューリッヒにある、チューリッヒ工科大学のHönggerbergキャンパス(以下ETH)を会場として開催された。

本カンファレンスの採択状況は、フルペーパー241件に対して採録が82件(採択率34%)、ショートペーパー125件